
The Knight Of DRAGON外伝『騎士-ナイト-』

龍牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Knight Of DRAGON外伝『騎士・ナイト
』

【Nコード】

N1671B

【作者名】

龍牙

【あらすじ】

『The Knight Of DRAGON』本編プロローグからの分岐です。正しき時の流れの中、ライダーバトルにおいて、かつて『秋山蓮』と名乗っていた青年の役割を演じる事となった者『北川カズヤ』。龍騎との戦いに敗れ、死んだはずの彼を呼ぶ声は……。

序章（前書き）

この作品はオリジナルを含む仮面ライダー龍騎と火魅子伝とのクロス作品です。これらの作品を読んで嫌悪する方はお読みにならない事をお勧めします。

序章

(…オレは死んだのか…。)

決して譲る事の出来ない願いを掛けた親友との殺し合い…その果てに自分は敗北した、友達を殺そうとした事は後悔していない…それは相手も同じなのだから…殺された事は恨んではない…相手が自分を殺したという事実をどう感じているのか、それが分からないほど浅い付き合いではないのだから…

(ダークウイング…今までありがとうな…。)

消え行こうとする意識の中で彼、『仮面ライダー騎士^{ナイト}』こと、『北川 カズヤ』は今まで共に戦ってきた自身の戦友、相棒であった契約モンスター『ダークウイング』への感謝の言葉を告げる、契約の上での協力とは言え、今まで力を貸してくれていた相手への言葉を告げる

(…アキラ…オーデインは…神崎は絶対にお前が倒せ…オレは…オレは必ずお前が勝つ、そう信じてる…。)

届かないであろう、最後の勝者を決めるべき戦いへと残った親友への激励の言葉を最後に最後にカズヤの意識は闇へと落ちていく……

……………

「あれえ、君は誰？」

…はずだった…

「なんだ!？」

突然の声に目を開けて飛び起きるとカズヤの視界の中に森と空中に浮かんでいるぬいぐるみが入ってきた

「…な・…なんだ…? こ、ここは何処だ? ……それにお前、新種のモンスターか？」

「あつ、モンスターは酷いな。それでもオイラは耶麻台国の神器、天魔鏡の精なんだぞ！」

「…邪馬台国…オレは日本史より、世界史のほうが得意なんだけどな…。」

『キョウちゃんとも呼んでおくれよ。』等と言いながら胸を反らす謎の物体X（カズヤ命名）を無視しながら、『日本史は輝の専門なんだよな。』等と考えているカズヤであった

「まあ、お前が何であろうと関係ないか。」

「ガーン、関係ないって。」

「…ここは何処だ…オレはあの時…。」

その後続く『ミラーワールドで殺し合いをしていて、死んだはず』
と言っ言葉を飲み込むと心臓の辺りに触れる

（あいつに付けられた致命傷どころか、かすり傷や古傷一つない…
オレは…なんで生きてる？ オレは死んだはずじゃなかったのか…
？）

「初めの質問だけど、ここは三世紀の九州。で、君が何でここに
いるかと言つとオイラがよんだからだよ！」

「そうか。」

カズヤはキョウの言葉に興味無さそうにそう答える、事実、カズヤ
にはここが何処であろつと関係ない

オーディンとの戦いは輝へと託した今となつては元の場所に戻りた
い理由もない、友との殺し合いにも後悔はない…あるとすれば最終
決戦のあの現場から消え、ライダーとしての未来を奪われた事への
絶望…唯一つであつた

「『そうか』って、それだけ？ もつとこうさ、さつきみたいに『
えゝ！？』とか『何ゝ！？』とかないの？」

「イヤ、別にここが何処でもどうでもいいし。それにしても、三世
紀か…何とかして中国のほうに渡つてみるかな、中国史の英雄を見

れるいいチャンスだな」誰もオレの事を知らない世界で生きるのも…今のオレには悪くないな。」

キヨウはカズヤの反応がかなり不満らしく、ブツブツと文句を呟いているが、それに対してカズヤも今後の事を呟きながら考えていたふと、カズヤの手がポケットの中の『それ』に触れる…そう、自分が北川カズヤと言う存在であった事の証『仮面ライダーナイト』の『カードデッキ』の存在が今の彼にはありがたかった

(…ダークウイング…お前も一緒だな…。)

心の中でそう呟き小さく嬉しそうな微笑を浮かべると、何処からか、ダークウイングの声が聞こえた気がした

「まあいいけどね。それで君……………え」と。

「オレはカズヤ、『北川 カズヤ』だ。」

「あ、うん、よろしくカズヤ。それでカズヤを…間違っただけだよんだのは耶麻台国を復興して欲しいからなんだ。」

「へー…滅んだのか。」

「うん。十五年前に狗根国に滅ぼされたんだ。」

「何、無茶な事を遣らせる為に人様をこんな変な場所によんでんだ、このアホ。」

カズヤはそう言い切り、チョップをキヨウの頭に叩きつけて沈黙さ

せる

頭を抑えながら、キヨウがカズヤを涙目で睨んで来る

「うゝ… 酷いな、今なら復興できるかもしれないんだよ。」

「…じゃあ訂正してやろう… 『かもしれない』で人をよびつけるな。…それで、何で復興できる… 『かもしれない』んだ。」

「そもそも耶麻台国が滅んだのは百五十年くらい前から直系に火魅子の資質を持った女の子が生まれなくて、仕方なく傍系で素質を持った娘を女王にしてきたんだけど五十年くらい前から傍系にすら資質を持った娘が生まれなくなっちゃったんだ。そんな時に、女王不在の時に狗根国に攻め込まれて…。」

キヨウの表情が曇る

「でも、耶麻台国が滅びるよりちよつと前に火魅子の資質を持った娘が五人、傍系だけで生まれていたんだ。」

「ほゝ。」

完璧にやる気を感じさせないカズヤの合いの手に気を悪くした様子も見せず話を続ける

「今までにも何度か狗根国に対する反乱は起こったんだけど、圧倒的に数でも練度でも負けている反乱軍は当然敗北。」

「そりゃそつだ。」

「このままじゃ徐々に狗根国に対して不満を持つ者はいても反乱を起こそうとする人はほとんどいなくなっちゃう。でも、『火魅子候補』と『神器の精』そして『神の遣い』の三点セットが、つてあれ？」

いつの間にかカズヤはキヨウに背中を向けて歩き出している

「ね、ねえ？　ちょっと、どこに行くのさ!？」

キヨウは慌ててカズヤを追い抜くと、彼の前に回り込み、怒った様に腰と思われる部位に手を当てながら言った

「君、オイラの話聞いてた？　君には耶麻台国を再興してもらっためによんだんだって。」

「ああ」

「じゃあ、どこに行くつもりなのさ？」

『何でお前に言わなきゃならない』と視線で訴えかけるが、

「……………大陸にでも渡って、この時代の中国でも見物する。そもそも、オレは日本史より世界史が好きなんで。それにダークウイングと共に天下をとってもいいな。」

律儀にキヨウの問いに答えた、彼の頭の中には…中国を統一して、皇帝となっている『仮面ライダーナイト』の姿を思い浮かべている、幸いにもキヨウにはその後半部は一切聞こえていなかったが…

「え？」

カズヤの返答にキヨウは困った様な表情をしたが、すぐにパツと明るい物を浮かべる

「そうだ、君が元の世界に還るには耶麻台国を復興させて女王火魅子に時の御柱を動かしてもらうしかないんだ。だから……………」

「オレは『元の世界に帰りたい』って言っていないぞ?」

「……………へっ?」

(こいつ、オレの言葉の意味を『折角だから、観光していこう』程度に受け取ったな…。この絶望の元凶が…)。

沈黙の後、間抜けな声を上げたキヨウから自分の言葉の意味をそう理解していたのだろうと推測してそんな事を考えていた

「え? でも。」

「縁があつたらまた会おう、さらばだ。」

呆けているキヨウに手を振りながらカズヤは立ち去っていく

「ちょ、ちよつと待つてよ!」

カズヤは切羽詰ったようなキヨウの声に再び足を止め振り返った、そこには声のとおり焦ったようなキヨウがいた

「どしたんだ?」

「『どしたんだ？』じゃないよ！ 君がいなくなったらオイラはどうするのさ？ 耶麻台国の復興は！？」

「そんな事はオレには関係ない。どんなに栄えていても結局は滅びる物だろうが…。それにオレは…まあいいか。」

「そ、そんな。で、でも、元の世界に戻るには…。」

「あのさ、オレはもう前の世界には何の未練もない。…イヤ、お前と輝が完全に消してくれたしな…。」

カズヤにハッキリと断られたキヨウはそれでも何かいい考えはないかと視線とともに思案を巡らせていた

「そ、そうだ！ この世界の事、何にもわからないでしょう？ オイラに協力してくれれば少なくとも生活に困ることは…。」

「いいな、それはそれで楽しそうだ。オレには強い味方がいるしな。」

ポケットの中からカードデッキを取り出し、カードデッキに刻まれた『蝙蝠』を象った紋章、そして…契約のカードを眺める

（そうだろう…ダークウイング。）

「うゝ、で、でも！ 神の遣いになれば地位や富や女の子だって好きな様になるよ。」

「興味ない……訳はないが…誰かに恵んでもらうのは気に入らない。地位なんて煩わしい物は持ちたくも無いしな。」

三度断られたキヨウは目に見えて意気消沈していたが、急に俯かせていた顔を上げた

（…いやな予感が…。）

そのキヨウの様子にカズヤの直感が『危険』と告げている…やっかいな事に巻き込まれると本能が警告していた

「じ、じゃせめてオイラを伊雅の所に連れてってよ。」

「伊雅あ？ ……誰だよ？」

「耶麻台国の元副王だった男さ。」

何を考えているのか探る様な視線をキヨウに向けるが、その真意は今のカズヤでは完全には測りきれない

「別にいいけど、その伊雅つか言う奴が何処に居るのか…それは分かってるのか？」

「うん。伊雅も神器を持つてるからね、って……は？」

突然、何かを疑問に思ったらしくキヨウはそんな声を上げた

「いや、さっき言ってた、火魅子候補と違って居場所は分かっているのか？ ……そう聞いているんだけど…。」

カズヤがそう言うとキヨウは傍目にもわかるほど確実に驚愕を表す

「な、何でわかったの!？」

「はぁ？ さっき自分で言ってただろうが。『火魅子候補と神器そして神の遣いの三点セット』、『伊雅も神器を持っている』ってな。」

「う、うん。」

「神の遣いと言つのは偶然よばれたオレの為のポジションだ。結局のところ、在ろうが無かるうがどっちでもいい…そんな形で権力者に利用されるのは御免だ。神器と言つのはつまり、王家の証。だが、元副王の伊雅って奴が神器の一つを持っているのに『今までにも何度か反乱は起こったのに《当然》敗北』。それは何故か？ 簡単だ…それは最後の一つ、絶対に不可欠な『火魅子候補』がいなかったから。違うか？」

カズヤの推測を聞いていたキョウは放心したようにゆっくりと頷く事しかしなかった

「で、伊雅の場所はわかるんだな？」

カズヤがそう問うとゆっくりと首を縦に振った

近くに落ちていた鏡…キョウの話だと、本体である神器だろうそれを拾い上げ、カズヤはキョウに話しかけようとした瞬間…

何かの《声》が風に乗ってカズヤの耳に届いた…僅かな物だったが…その音の正体は『悲鳴』

（今は…。場所は…向こうか、助けない訳にはいかないよな…《

輝』：お前の親友として…。）

敵が何であろうと《仮面ライダー》にさえ変身すれば負けはしない
…そんな確信を持って、カズヤは森の中を駆け出した

「あつ、待つてよ…そつちじゃ…。」

「ダークウイング！」

「え、なにを…『キイイイイイー！！』『うわあー！！』」

カズヤが自らの戦友の名を叫ぶと、その意味が分からず聞いてくる
キョウだったが、突然、天魔境の中から出現した蝙蝠型のモンスター
…カズヤの契約モンスター『ダークウイング』に驚き、気絶した
キョウをダークウイングが咥え、カズヤはダークウイングに捕まり
目的地へと急ぐ

異世界、九洲の地にて、ライダーバトル最後の戦いに望む戦士を決
める決戦において、紅き騎士に敗れた、漆黒の翼と鎧を纏う鏡の世
界の騎士が神器たる鏡から降臨した…漆黒の翼、闇の翼『ダークウ
イング』と契約せし騎士…彼の者の名は『北川 カズヤ』…もう一
つの名は…『仮面ライダー^{ナイト}騎士』

その名こそはライダーバトルにおいて、かつて『秋山 蓮』と名乗
っていた青年の役割を演じる事となった者の名

...<u>u

序章（後書き）

火魅子伝とのクロスで本編プロローグで龍騎に敗れた騎士が主人公のストーリーです♪

漆黒の翼を纏う風の騎士が異世界に舞う。

巻章

契約モンスター『ダークウイング』に掴まり、悲鳴の聞こえた場所に急ぎながらカズヤは回収しておいた天魔鏡に視線を向ける。

「どついう事だ？」

精霊とか言うキョウの言葉とダークウイングが現れた事から考えて、間違いなく『それ』は鏡であるはず…だが、その鏡はカズヤの姿を映していなかった…。正確には鏡であるはずなのに何も映していないその鏡に対して疑問を持ちながらも優先すべき事はその疑問に対する答えを出すことではないので頭から疑問を消し、手持ちの荷物の中で鏡の代用品に成る物はないかと探してみる。

「……腕時計とか有ればな……。つと、これが有ったか…。」

ポケットの中に手を入れてみる…そこからカズヤが取り出したのは一本のペーパーナイフ…しっかりとその金属部分が彼とダークウイングの姿を映し出している。

（…これなら、鏡の代わりになるか…。）

視界の中に目的地を収め、素早くカードデッキをペーパーナイフの刀身に向ける。

「変身！」

二つの像がカズヤへと重なり、ダークブルーのスーツとプロテクターに包まれ、騎士の甲冑を思わせるフルフェイスの仮面に顔を包ま

れた騎士へと姿を変える。

その名は『騎士^{ナイト}』…13ライダーズの一人『仮面ライダー騎士・ナイト^{ナイト}』

「ダークウイング。」

変身したナイトはダークウイングへと指示を出す、それに従いダークウイングはナイトの背中に装着し、翼へと変わる

腰に有るレイピア型のカードリーダー『ダークバイザー』を抜き、ベルトのカードデッキから一枚のカードを抜き出しそれを差し込む。

『ソードベント』

機会音が響き、ナイトの手の中にダークウイングの尾を象った槍、ウイングランサーが現れる。

「悪いが…その子は助けさせてもらっぜ…化け物!!!!」

仮面ライダーの強化された視力が正確にターゲットを捉える。人数は三人、一人は少年（彼が一番年下に見える。byカズヤ）、残り二人は女の子（二人とも中々可愛い。byカズヤ）、そして、そのうちの一人、蒼に近い髪の少女を捕らえている醜悪な人型の化け物の姿。

ナイトの武器は主に槍とレイピアと、斬る事よりも突き刺す事の方が向いているのだ。ならば自分がすべき行動は、すぐに判断でき

る。

手の中に出現した愛槍を視界の中に捕らえた敵を狙う。力任せにウイングランサーを獲物である少女を喰らおうとしている人型の化け物に向けて投擲する。

「ぐがあああああ！！！」

突然、腕に突き刺さったウイングランサー、その痛み思わず問え得ていた少女を放してしまう。

「え？」

呆然としている少女達を後目に化け物はウイングランサーを投擲した方向を向く。

「だれだお、おれさまにこ、こんなもの「黙れよ、化け物。」。」

化け物の言葉を遮り、その化け物から放たれる威圧を受け流しながら、森の中からナイトがその姿を現す。

「しかし…ミラーモンスターの出来損ないと言うのもおこがましい醜悪な顔だな。まあ、いいさ…オレは女の子を襲う奴には容赦しない事にしてるんで…。」

(…しかし、外見はともかく、人の言葉を解するだけ有って…それ

なりに知能は有るのか…？ 何処からどう見てもそうは見えないけどな。」

軽口で挑発しながらも、ライダーバトルの中で磨かれた分析能力が先ほどの様子から相手を分析する。

元々、ナイトのデッキは龍騎の様な強力な攻撃力で戦うパワータイプのデッキではなく、様々な特殊なカードを使い戦うテクニカルタイプのデッキなのだ。

的確にカードを使い確実に戦いを進めて行かなければ敗北は必至、『サバイブ―疾風―』のカードと言う切り札を手に入れたとは言え、それでありながら、最後の戦いまで勝ち残った彼の能力は経験と共に磨かれているのだ。

「な、なにを。」

「貴様に発言を許可した覚えは無い。」

周囲に他の敵は居ない、相手が僅かに自分に対して警戒心を持って動かずに居るのならば、先手を打つまでと判断し、カードデッキの中から一枚のカードを引き抜き、それを展開させたダークバイザーの柄の中に差し込む。

『トリックベント』

機械音が響くと同時に幾つものナイトの分身を作り出す。分身といっても実体が無い存在ではなく、ナイトと同じ姿をした実像を持つ

た分身達なのだ。

後方に立つナイトが本体と言う事を表す様にダークブルーのマントを纏い、分身達に指示を出す。

「は、はや…ぐは！」

ナイトの分身達のトリックナイトダークバイザーの刃が縫い止める様に次々と化け物の全身に突き刺さる。

「ああ、そうそう…オレのウイングランサー槍は返してもらっぞ。」

激痛に化け物が悲鳴を上げるがそれを無視し、化け物の腕に突き刺さっていたウイングランサーを引き抜く、それと同時に彼の知る生物の物とは違う、緑色の血液が化け物から噴出す。

「そんなも、ものがおれさ、さまにきくともお、おもってるのか
…!?」

「思ってるよ。」

『ファイナルベント』

敵が一体しか居ない以上、早く戦いを終わらせようとして、カードデッキから引き抜いたカードをカードリーダーの中に差し込むと同時に電子音が響く。

「はっ！」

背中のマントが翼へと変わり、ダークウイング闇の翼を纏い、ナイトは天高く舞い

上がる。それが彼の持つ必殺技なのだ。

ファイナルベント

「はあああああああああ！！！！」

ウイングランサーを相手に向け一直線に落下する途中で翼がマントへと変わり、彼の全身を包み、一つのドリルの様になる。それがナイトの持つ必殺技…

ファイナルベント

「飛翔斬！！！」

ナイトの一撃が化け物の体を貫き、その余波で上半身を粉々にした。ダークウイングの翼に付く、化け物の肉片を不快に思いながら、思ったよりも呆気なく勝利してしまった事に呆然としながら、ベルトからカードデッキを外す。

それと同時に鏡の砕け散る音共にナイトはカズヤの姿へと戻り、この化け物に襲われていた二人の少女とおまけの少年に視線を向け。

「それで、君達…大丈夫だった？」

そう問いかけた。

「あ、ありがとうございます。」

「ああ、気にしなくてもいいよ、女の子を助けるのは、騎士^{ナイト}の役目なんですね。」

綺麗な長い黒髪の少女からの我に返りながらの感謝の言葉に、そんな軽口で返す。思わず、どれくらいの間言っていなかったであろうか分からない、その言葉を懐かしく思ってしまう。

「あの、あなたは？」

黒髪の少女、伊万里は軽口で答えた自分と（外見上）そう歳が変わらないであろう見た事も無い服の少年カズヤに対して警戒を浮かべながら、そう問いかけた。

初めはその姿を見た時、上級の魔人とも思っていた。低級とは言え魔人を倒し、自分と乳姉妹の上乃と弟分の仁清を助けたとは言え、敵で有るならば状況はもつと悪くなったただけなのだから。

もつとも、そう思われているとも知らず、カズヤにしてみればミラーモンスターよりも弱かったと言う考え方しかしていなかったが…。

カズヤはそんな伊万里の心境を知ってか知らずか、何処か能天気な笑顔を浮かべて答える。

「オレは、カズヤ。ただの通りすがりの正義の騎士ナイトだよ。」

（…二人とも結構美人だよ…助けたお礼に…って、よく考えたら厄介事を一つ持っているんだったよな…。）

伊万里の彼を警戒する心情など知らず、彼の言葉の中にあつたこの国には無い言葉『騎士ナイト』の意味に少し混乱している彼女達を後目にそんな事を考えていた。

何処かそんな彼を見てみると、警戒しているのがバカバカしくなる

伊万里だった。実際、カズヤにしてみれば必要が無い限り、女の子（それも美人）とは敵対する気も無く、ダークウイングも付いているのだ、必要以上に警戒する必要もない。

「カズヤさん…。」

（さん付けも悪くないな。っと、そんな事考えてないで、届け物をさっさと片付けさせてもらおうとするか…。）

『そうしないと自由に動けない』と気絶しているキヨウの入ったポケットの中の天魔鏡を軽く握りながら、後ろを降り向く。

「他に奴の仲間には居ないようだけど、気をつけくれ。似た様な者が他に居るかもしれないからな。」

「え？ ど、どこか行くんですか？！」

伊万里が慌てて問いかけると、カズヤはそれを聞き後ろを振り返る。

「どうした？」

「いえ、でもどちらへ？ その、もし決まっていなかったのでしたら私達の里へ来ませんか？」

遠慮がちに誘ってくる彼女に対してカズヤは

「ああ、ちょっと、用事が有ってね。まあ、縁があったらまた合おう…君たちの名前はその時教えてもらうよ。」

微笑を浮かべながら、その視線を伊万里から上乃へと移しながら、

そう答える。初めから、完全に仁清はカズヤの言う『君達』の中には入っていないのだろう。

そんなカズヤに対して顔を紅くしながら呆けている伊万里と上乃とは対照的に、彼の言葉に意味を理解したのだろう…仁清が不機嫌そうに彼に視線を向けている。

「じゃあ。」

そう告げて、暫く歩いた所で後ろから伊万里が声を掛ける。

「また、会えますよね?!」

「ああ…。縁があつたら…いや、必ずな。」

彼には予感があつたのだ…必ず再会の時訪れるという…そんな予感を胸に、軽く手を振りながら、彼は歩いていった。

なお、余談だが目を覚ましたキョウがカズヤの『お前のお蔭で二人の美人とお近づきになれるチャンス逃した』と言う言葉と指示により、『腹減ったら食っていいぞ』と言うコメント共にダークウイングに啜えられながら連れて歩かれたそうだ。

式章

伊万里達と別れた後、一時間後…（ダークウイングによって）目を覚ましたキヨウを連れて、カズヤが山道を歩いていた。

その足取りはトボトボとした物で、心なしか上半身が俯いている。

「まだなのか？ キヨウ？」

伊万里達と別れてから一時間歩き続けた結果、疲れ切ったカズヤの言葉だった。

「もう休憩するの？ 二十世紀人はひ弱だねえ。そんなんじゃ日が暮れるまでに会えないよ。」

「…選べ…ここで本体捨てられるか、ナイトに変身してダークウイングで空を飛んで会いに行くか、休憩するか？」

そもそも、伊雅と言う人物の元へと届けて欲しいと頼んだ（本人としては様々な思惑があるが）のはキヨウであり、カズヤは見捨てても別に構わないのだ。そして、ナイトに変身して、空から向かうことも『そんな事したら、魔人と間違われるよ』と却下したのもキヨウである。

「しょ、しょうがないなあ。じゃあ、十分休もう。」

「……いや、一刻も早くお前という厄介事を片付けたい……。遠慮するな、最高速で連れて行ってやる。」

疲れ切った表情に邪笑を浮かべ、カードデッキをペーパーナイフへと向ける。見ればペーパーナイフに映るダークウイングもその表情に愉快と言いたげな笑みを浮かべている。

「す、すみませんでした！！　どうか、好きなだけ休憩してください――！」

ペーパーナイフをポケットの中に戻し、近くに椅子代わりに丁度いい石を見つけて座り込むと、無言のままキョウへと視線を向ける。

「……二つほど確認したい事があるけどいいか？」

「なんだい、カズヤ？」

『何でも聞いてよ』と言いたげな様子で胸を張っているキョウを黙殺しつつ、今の自分の持っている最大の疑問をぶつける事にした。

「向こうとの距離の差はどれ位有るんだ？」

「えーと、君達の距離で言うと百キロぐらいかな。」

とんでもない事を軽く言ってくれるキョウに対して疲れが倍増する思いのカズヤだった。

「……やっぱり、変身していいか？」

「どーしてえ！？」

「百キロと言えば、東京↓熱海間の距離だろう！　オレは変身しなけりゃ普通の人間だぞ。」

「訳の分からない事を…。」

カズヤを説得しようとし始めそんなキョウを手で制しつつ、二つ目の疑問を問いかける。

「二つ目の質問…向こうはこっちの事が分かってるのか？　こっちと逆方向に移動されてちゃ、生身で幾ら急いだ所で意味は無いんじゃないのか？」

「それは大丈夫だよ、カズヤ。向こうも近づいてきてるから、どんな反応が強くなってるんだ。カズヤが魔人みたいな姿に変身しなければ、向こうの歩く速度の方が速いから、実際にカズヤが歩く距離は三分の一で済むよ。」

「…そうか…。」

呼吸を整えながら、空を見上げる。

「そつだよ、だから、がんばって…。」

「今日中に会うのは諦めて…向こうに頑張ってもらおう…。」

真剣な顔でキツパリと言い切るカズヤの言葉にずっとこけるキョウだった。

「なんでえ？」

「…疲れすぎてたら、お前が余計なことを言う前に逃げられないからだろうが。」

「ギクウ！ い、いやだな…余計な事なんて言う訳無い…」

明らかに動揺して目を逸らしているキョウの様子にカズヤは『やっぱり』と言う意思を浮かべる。

「それにそんな事言ったら、今日は二人で野宿になっちゃうよ。いいの？」

「…この陽気なら死にはしないだろうし、獣が襲ってきてもダークウイングが守ってくれるだろう。」

完全に休憩モードに入ったカズヤを尻目にキョウはぶつぶつ言いながら、何かを考え始めた。

「仕方が無い、あそこに行こう。」

「あそこ？」

休憩して空を眺めていたカズヤがキョウへと視線を向ける。今回はいやな予感もしないので、大して気にもしていないが…。

「この近くに耶麻台国の神を奉った神社があるんだ。今はどうなってるかは分からない…多分、狗根国によって廃棄されてると思うんだけど、夜露ぐらいはしのげる筈だから。獣に襲われる心配もないし。」

キョウの言葉に暫く考え始める。確かにダークウイングと言うガードが居るにしても獣に襲われる心配があり、慣れない野宿では却って疲れが溜まる心配があるのだ。キョウのその申し出はありがたい。

「分かった。それでその神社の場所は？」

「そんなに遠くないよ。うーん、そうだな、十キロぐらいだよ。」

『オレ達の間感じゃあ、十分すぎるほど遠い』と思いながらも、野宿よりもいいと考え、キョウの申し出に応じることにする。

「雲も出てきた事だし急ぐぞ。濡れて風邪引いたら、薬も医者も家も無いオレには死活問題だ。」

「はいはい、じゃあ急ぐよ、カズヤ。」

妙に張り切っているキョウの態度に僅かな不審を感じつつ、夕立に遭う前にと考え急ぎ足で歩き出す。

間に数分ずつの休憩を挟みながら、歩く事三時間…ようやく目的地の神社へと向かう階段まで辿り着く事が出来た。

「…オレは常々思っているけど、日本と言う国の神社仏閣はどうし

て階段の上に建てるんだ？」

実際、西洋の教会に比べて、日本の神社仏閣はどうしても階段の上に建てる傾向がある。しかも、由緒正しい場所ほど高い所に…（勿論、例外もあるだろうが）。

「まあまあ、これを登り切れば今日の仕事は終わりだからさ。ほら、最後の一踏ん張り。」

「まあ、ここまで来たんだ… ゆっくり、のんびり行こうぜ。急いだ所で、可愛い女の子とか、綺麗な女の子とかが待っていてくれる訳じゃないんだし。」

「あ、いいの、そんな事言つて。ガールフレンドに言いつけちゃうよ。」

場を和ませる為の冗談なのだろう… 愉快そうに笑いながら言うキヨウだったが、彼とは対照的にカズヤは辛そうな表情を浮かべる。

「…言わなかったか…？ オレを待っていてくれる大事な人はもう居ない…。」

心から凍り付きそうなほどの冷たい声と、触れたら切れてしまいそうな刃を連想させる視線。キヨウは改めて理解する彼が単純に強力な力を持っただけの人間ではなく、戦士である事を…。

それと同時に彼から感じた悲しさ… 大切な者を奪われた人間であると言う事を理解した。ならば、狗根国によって支配される現状をみれば必ず力を貸してくれると考える。

「どうした？」

さつきから黙っているキヨウを不審に思いじと目で銅鏡の精霊を見る。

「あ、あははは…。さすがにおいらもちよつと疲れちゃったから。」

「…精霊でも疲れるのか？」

「まあね。こうやって実体化しているのも、結構能力使うんだ。キヨウは出っ放しだったたる、だから、早く鏡の中に戻って一休みしたいんだよ。」

「ふーん…。ミラーモンスターとは違うんだな。」

銅鏡を取り出し視線を向けてそんな事を呟く。当然ながら、ミラーモンスターは鏡の中の存在ではあるが、しっかりとした実体を持っている。

「当たり前だよ！ おいらをあんなのと一緒にしないで欲しいな！」

『心外だ』とでも言いたげな態度で腰に手を当てて叫ぶキヨウだが…。

「…『ダークウイング』からの伝言だぞ。『次、言ってみろ…餌にするぞ。』だそうだ。」

カズヤの言葉に恐怖に怯えながら、真っ白になるキヨウだった。

「さつさと神社に行くぞ。地面の上じゃなくて、建物の中でゆつくり休みたい。」

「あ、ああ、そうだね。」

キヨウは正氣に戻ると慌てて彼の後をフワフワと浮きながら付いて行く。

階段の両側は見事な広葉樹の森で、木の幹は太く、高さは二十メートル以上有る為、日差しが遮られ、まだ昼間だと言うのにあたりは暗く、心地よい樹の薫りが鼻腔をくすぐった。

「この階段は何段くらいあるんだ？」

「二百段くらいかな？」

「そうか。」

ライダーバトルである程度身体能力は鍛えられているのだ。並の間よりは鍛えられている。二百段程度の階段では音を上げる程ではない。

それから数十分後

「ここが、その神社か？」

それほど広くない境内は、鬱蒼とした原生林の中にあり、二十世紀では珍しい樹齢数百年と思われる木々に囲まれた物音一つしないその場所は、神社と言う神聖な場所に相応しい神秘的な雰囲気満ちていた。

「カズヤ、カズヤ。」

神秘的な景色に見惚れていたカズヤに小声で呼びかける。

「なんだ？」

カズヤがキョウの方へと視線を向ける。

「ちよつと、その辺の樹の陰に隠れてて。」

「なんでだよ？ 誰かいたとしても、オレが変身すれば…人間や獣相手なら…。」

「いるのが、敵じゃなくて味方だったらどうするのさ！？ ぼくなら精霊だから、普通の人間に気配を悟られる心配は無いから、建物の中を調べてくるよ。」

「そうか。なら、頼んだぞ。」

素直にキョウに従って樹の陰に隠れる。それを確認して空中を飛んで神社へと近づいていく。近くで見るとここが使われなくてから年

単位で時が過ぎている事を表す様に汚れが目立っている。キヨウは建物の直ぐ前で急降下すると床下へ消えて行った。

「……………」

無言のままキヨウの様子を見守っていると、暫くしてから慌てた様子で戻ってきた。

「どうした、人でも居たのか？」

「そ、そうだよ！ あそこ、誰か使っている……！」

キヨウの言葉にカズヤの視線が鋭さを増す。

「どういう意味だ？ 詳しく話せ。」

「あのね、床下にいろんな物が転がってる。工具だとか、何かの部品だとか。それかなり新しいから、最近、誰かがここにいたのは間違いないよ！」

「なるほど……だったら、ここで待っている事は得になりそうだな。」

キヨウからの報告を聴き、笑みを浮かべつつ答えるカズヤの言葉に一瞬だけ、キヨウに驚愕が浮かぶ。

「ど、どうして……！ 狗根国かも知れないのに……そうじゃなくても、もう戻ってこないかもしれないのに！」

「第一に……狗根国の人間ならこんな不便な所で隠れながら使っている訳が無い。第二に……部品はともかく工具まで置いていったという

事が戻ってくるという考えの理由だ。」

（やっぱり、カズヤって…。）

自分の連れてきた人間の想像以上の優秀さにキヨウは思わず呆然としてしまう。もっとも、本人は協力する気は無いが…。

「キヨウ、中に誰も居ないようなら、そろそろ入った方がいいんじゃないか？」

「あ、うん。でも、気をつけてよ、何時戻ってくるか分からないから。」

「分かってる。」

キヨウの言葉にそう答え、社殿に上がる階段を駆け上がり、扉を僅かに開けてから一度扉から離れる。反応が無い事を確認しつつ、扉を開き中に入る。

室内は暗かったが、所々破れた壁や屋根から光が差し込み、何も見えないと言う事もない。予め目を暗さに慣らしておかなかった事を僅かに悔やみつつも、目が暗闇に慣れてくると部屋の様子がはっきりと分かる。

「誰かが使ってるのは間違いないな…。荷物まで置きっぱなしと言う事は、戻って来る意思も有ると言う事か。」

「ふうん、床のここが開いて床下に通じているんだ。なるほど、なるほど。手を加えていると言うことは、たまたま昨日、今日、ここに立ち寄ったと言う訳じゃなさそうだ。」

などと床下を調べながら独り言を呟いている。

壁際には葛簾や寝袋に寝具がいくつも置いてある。周囲に散乱しているのは恐らくは衣服だろう。

「みんな、女物だ。……って事はここを使ってる人間は全員女性なのか。しかも、ここに脱ぎ捨ててある服を見ると巫女が居るな。」

カズヤが他の場所を調べようと視線を逸らした隙に近づいたのだらう、キヨウが衣服を調べながらそう言っている。

「どうする？ 出かけてる奴らもそのうち戻ってくるだろうし、ここで待つか。」

「うーん、どうだろう。最悪の事態を考えると相手の正体が分からない以上鉢合わせしたくないな。」

「ま、どこかに隠れて待っているか。こんな所を使ってる人間なんて、大抵、元耶麻台国の関係者だろう。そいつ等にお前を引き渡せば、オレはお役御免だ。」

そう言いながら最初にキヨウが調べていた木の床を蹴り、その付近にある出っ張りに手を触れ、持ち上げる。

「隠れるとしたら、やっぱりここだな。」

カズヤが床下へ潜り込むとそれに続いてキヨウも床下へと潜り込む。床下も十分暗かったが、それでも外と通じているらしく光が差し込んでくるので、目が暗闇に慣れているカズヤには問題なかった。

「ここにしよう。カズヤはおいらが穩伏おんぶくの術で気配を消すから。」

「そんな事もできるのか、お前。」

初めて感心した様子でカズヤはキヨウを見るとキヨウは胸を張って答える。

「まあね、神器の精だからね、カズヤ一人ぐらいなら。」

「じゃあ、速くやってくれ。」

「ちよつと待っててね。」

キヨウはカズヤの周囲を一回りして、地面の上に円を描く。次に円の周囲の何箇所かに何か不思議な文字を描いていく。

「はい、できたつと。この円から出ちゃ駄目だよ。出たら効力が消えちゃうからね。」

「ああ。」

カズヤがキヨウの言葉に同意を示して腰を下ろすとキヨウもその隣に腰を下ろした。

「ふう。少し疲れちゃったな。ねえ、カズヤここを使ってる人間が戻ってくるまで、ちよつと休んでおきたいから、銅鏡出してよ。」

「ほら。」

ポケットの中に入れておいた銅鏡を取り出す。

「多分ね、伊雅が持つてる神器がおいらの位置を教えてくれるはずだから、きっと明日になれば伊雅もこのあたりまで来ると思うんだ。」

「神器同士で引き寄せ合うと言う訳か。ただ、向こうはお前に比べて探知能力は劣っているんだろう?」

「そうそう。伊雅の持つてる神器はおいらに比べて探知能力が劣っているから、こっから近付いてやらないと反応しないんだ。」

「でも、向こうの探知能力の範囲内に入ったんだろう?」

「うん、このくらいの距離まで近付けば、向こうの神器がおいらの位置を見失うことはないはずだから。」

思えば龍騎とのライダーバトルの最終決戦を終えてから、歩き通しで訳の分からない化け物との戦闘までこなしたのだ。何故か龍騎との戦いの疲労は無いとは言え、疲労は溜まっている。

「なら、今日はゆっくり休ませてもらうか。」

「そうだね。あ、誰かがここに近付くのを感知したら出てくるからじゃあね。」

それだけ言い残して、キョウは鏡の中に吸い込まれていった。

「…やれやれ。輝に負けて死んだと思ったら、訳の分からない世界で目を覚まして、運び屋の真似事か…。さーて、こいつを届けたら

どうするかな？　なあ、^{ダークウイング}相棒。」

そう、今はミラーワールドの中にいる契約モンスター『ダークウイング』へと問いかける。

「そう言えば…輝は元気にやってるかな？　まあ、オーデインはちやんと倒しただろうしな。」

そう言っただけでそんな笑みを浮かべる。勝利を…願いを託した友への信頼は決して揺るがない。信じているのだ…輝の力を…。そうして、カズヤはキヨウの張った結界の中で神社を使っている人間が来るまで待ちつづけた。

参章

地面に置かれていた銅鏡の中からキヨウが顔を出した。小さな顔に緊張の表情を貼り付けたまま空中に浮かんで目を閉じ、ひたすら何かを探るように神経を集中させている。

「やっぱり。」

目を開いたキヨウが直ぐ横で眠っているカズヤの体を揺さぶった。

「ねえ、カズヤ、起きてよ。カズヤったら！」

「ん…？ ああ……。」

薄目を開けたカズヤがキヨウの顔を見ると意識を完全に覚醒させる。ライダーバトルでの不意打ちに対する警戒の経験ゆえか、最近の寝起きはいいのだ。

「寝てたのか…色々有って疲れてたからな…。座りながら寝たから、体が痛いな。」

首を回し、肩を上下に動かしながら、体をほぐすとカズヤはキヨウの方へと視線を向ける。刃のような鋭さを持った視線が彼が戦士である事を確認させる。

「それで、何かあったのか？」

「ここに誰かが近付いてくる。」

キヨウの言葉を聞き、幾つかの答えを考えた結果、三つの答えを出す。それらの中の答えの何れが正解か確認するためにキヨウへと質問をつなげる。

「人数は？」

「総勢数十人といった感じかな？ 近付いてくる人間の気配から見ると。」

「チツ、最悪の答えが大正解か？」

キヨウの返事に舌打ちと共にその言葉を返す。こんな朽ち果てた神社にそんな大人数でやってくるとしたら……答えは一つしかない。狗根国の一団であると言う事である。

「最悪の答えって？」

「荷物から見ても分かるとおり、ここを使っているのは精々四、五人と言った所だろ。それから考えて数十人の人間が一度に向かってくるのは不自然だ。不自然を自然にする一番無理のない可能性……それが向こうが狗根国の連中という可能性だ。それで、その連中はこっちに向かつて真っ直ぐ近付いてきてるのか？」

キヨウの疑問を自分の推測から導き出した答えを答えつつ再び質問を重ねる。最悪の答えだったとしても、偶然この近くを通りかかったとも考えられる。

「う、うん。まっすぐこっちに近付いてきてる。たまたま近くを通りかかったって感じじゃないんだ。」

「キョウ、一応、偵察に行つて来てくれ。普通の人間には見つからないんだろ?」

「うん、様子を見てくるよ。何か胸騒ぎがする。」

そう言つた瞬間、キョウは床下の狭い空間を物凄い勢いで飛んでいった。途中、外に出る直前で振り返ると、

「言つておくけど、おんぶく穩伏の陣から出ないようにね。下手に外に出ると気配を気取られちゃうかもしれないから。」

「ああ、分かつた。」

手を振りながら、外に出て行つたキョウを見送るとキョウの描いた陣に視線を向ける。そういう系列の漫画や小説で見た様に一度外に出ると効果が消えてしまうのだろうと考える。

「……………最悪の場合、迎え撃つ方法を考えた方がいいかな?」

最悪はダークウイングとライダーに変身した自分で追い返すなり、ミラーワールドへ逃げ込めばいいと考えるとここで隠れているよりもそっちの方が安全ではないか等と考えてしまう。

上から剣を突き刺すなり武器を振り回される等されたら気配を消した所で意味は無い。そういう場合の対策も有るのだろうが…詳しく陣の効果は知らないのだ…信頼の置ける手段の方が安全性が高いと考える。

意を決して床下から這い出るとカズヤは壁に添って部屋を移動する。鏡か何かが見つかれば、ライダーへの変身やミラーワールドへの侵

入も容易に出来る。

先ずは荷物を確認させてもらおうと、持ち主達へ対して心の中で謝罪すると籠かこや葛籠つづらの蓋ふたを開ける。

最初の籠に入っていたのは見た所、女物の衣服だけだったので直ぐに蓋を閉める。他の葛籠や籠にはお札や竹簡ちくかん等が詰まっていた。竹簡かんや布製の札を手にとって見るが、時代が違うのだろう、カズヤが読める字ではなかったので、元に戻す。

「布や竹簡ちくかんなんて使っている所を見ると、紙は発明されてないのか？」

キヨウから説明された自分のいる世界の情報を思い出す。

「魔法みたいな技術はあっても、紙は作られないのか…。いや、待て…。」

思い起こすのは授業で聞いた紙の発明された時期…

「紙が発明されたのが後漢の蔡倫だったな。一世紀いや、二世紀とあったところか…？ 今が三世紀の日本に近いところと考えるとまだ伝わってないか、一般には広まらず一部の権力者の近辺のみに普及していると考えた方がいいか。けどな…。」

カズヤは床に散らばっている衣服の一つを拾い上げそれを見つめる。

「随分と三世紀には似つかわしくないデザインだな。まあ、そんな物は趣味のレベルだから、深く考える必要は無いか。」

そう言つて即座に切り捨て拾つた服を綺麗に畳み直して最初に開いた籠の上へと乗せて、再び壁に沿つて歩き始める。

「他には特になしか…。うん？」

入り口から一番離れた位置にある壁に小さな扉を見つける。

「…隠し扉か。RPGとかだと中には強力な武器とか入ってるのがパターンだけど…。」

床から一メートル程の高さにある朽ち果てかけた扉を手前に引くとそれは鈍い音を立てて開く。

そして、部屋の中を覗き込むとそこには不思議な形状をした長さ1・8メートル位の細長い物が転がっていた。

「へー…なんかアイテム発見かな、これは？」

一辺六十センチほどの狭い空間に上半身を押し込み、扉の枠へと乗せた腰を始点にして振り子の様に頭を下に振ると、軽く回転して、扉の中の空間へと降り立つ。思ったよりも部屋は広く何とか立つことは出来る。そして、カズヤは目の前に落ちているそれを拾い上げた。青銅製なのだろう、青緑色をしてかなりの重さがあった。

よく見てみると片側の端に丸い円盤状の皿の様な物が付いていて、その中央には芯の様な物が飛び出ているのが見えた。その反対側はその部分で全体を支える為なのだろう、大きく広がっている。

「なんだ…燭台か何かって事か…？」

何でそんな物を態々隠し扉の中に隠してある部屋の中に置いてあるのか疑問だが、ここが狗根国によって廃棄されてると言うキョウの言葉から推測すると重要な物は持ち去られ、これは取り残された物とも考えられる。だが、それだと隠し扉を元に戻したと言う点での疑問が浮かび上がる。

「…分からないな…？ 何でこんな物だけがここに…？」

後でキョウにでも聞いてみるかと考えて、床の置こうとした時、突然『ぼん』と言う音が響く。

「な、なんだ!？」

音が響いたのはカズヤの持っていた燭台だった。蠟燭も油も無いのに燭台の先端が燃えている。

「どうなってるんだ…これは？」

ライダーバトルという名の非常識を体験していても流石に燃料も無いのに燭台が燃えているという非常識に一瞬だけ固まってしまう。

『そこにいるのは誰だ!？』

その時、低く鋭い声が社やしろの中に響いた。

その声到我に返るとカズヤはポケットの中のペーパーナイフとカードデッキを取り出す。

（拙いな…誰か来たのか？ どうする…？）

「そこに隠れている奴、出て来い。」

考えが纏まる前に足音が近付いてくるのが分かる。気配は二つ。恐らく物騒な雰囲気から考えて武器も持っている事だろう。

「出てこないのなら、死んでもらうぞ。」

（…どうする…？ 一応、投降した後、耶麻台国の関係者だったら、即座にキヨウの本体を引き渡して逃げるけど…。狗根国とか言う連中の偵察だったら…。）

「出てこないのなら、やむを得んな。清瑞^{きよみず}、引つ張り出すのだ。抵抗したら、切手も構わん。」

カズヤが考えを纏め上げると同時にもう一人の相手が声を上げる。

先程まで聞こえた声の高さと聞こえてくる口調から近付いてきているのは女で恐らく後から聞こえたそれなりの年齢の男性の部下と推測される。

「待った、待った。今から出るから、ちょっと待ってくれ。」

軽い口調で言葉を返す。それと同時に社の中にいる人間の動きが止まった事が分かった。

「ならば、早く出て来い。」

今度は男の声で清瑞^{きよみず}と呼ばれていた女の声が聞こえる。

「ただし、ゆつくりとだ。妙な動きをしたら、切り殺す。」

(…ダークウイング、向こうが武器を持ってオレに向かってきたら、奴の武器から飛び出して牽制してくれ。オレはその隙に変身する。)

『キィ。』

冷徹に続けられた清瑞きよみずと呼ばれた女の声に身震いする。『殺す』と言う言葉には何の力みもない。それと同時にライダーバトルを続けていた頃の自分にも、そんな人を殺す事をなんとも思っていない人間特有の落ち着きがあれば、どれほど楽だっただろうと考えて、苦笑してしまう。

最低限、相手の様子を確認しようと開いている扉から顔を覗かせると、正面には黒ずくめの衣装を着た女が立っている。顔はマスクのような物で半分ほど覆われてよく見えなかったが、除いている目元を見る限り、かなりの美人に思われた。その手にあるのは『幸い』にも、冷たい光沢を持った本物の刀と言うことだろう…。

もう一人いるはずの男の姿はなく、恐らくどこかに身を隠しているのだろう。

(…恐らくもう一人の男も武装しているはず…目の前の相手をダークウイングで牽制して、その隙に変身するにしても、もう一人の位置を確認してからの方がいいだろうな…)。

元の部屋に戻ろうと両腕を伸ばした時、すっかり忘れていた燭台の炎が彼の顔を焦がした。

「あち！！！」

思わず持っていた燭台を放り投げる。向こうの部屋に転がり落ちた燭台が乾いた音を立てる。すると同時に男と女の大きな声が響いた。

「こっ、これは！！！」

「ばかなっ！？」

転がり落ちても、なお、燭台の炎が皿の上で燃え続けていた。正面に立った女が油断のない足取りで近付き、そつと燭台を拾い上げ、手にした物を掲げ、燃え続ける炎をまじまじと見つめる。

（なんだ？ 様子が変わった。）

カズヤは奥の部屋の中から女の様子を伺う。しばらく女は炎を見つめていたが、そつと後ろを振り返った。

「伊雅様、これは！？」

（伊雅！？）

カズヤの視界の中に男の姿が現れる。男が呼ばれている名『伊雅』とは確かキヨウが自分を届けてくれと頼んだ相手……。

「信じられん……。天の炎が燃えている。」

『伊雅』と呼ばれた男は恭しい態度で『清瑞』と呼ばれた女から燭台を受け取ると、炎に手をかざした。

「まさか、これが燃えるとは……これは何かの瑞兆なのか？」

『伊雅』と呼ばれた男はそれをそつと床の上に置くと、手を合わせ目を閉じ頭こぶを垂れた。それを見て『清瑞』きよみずと呼ばれた女も跪き、男に倣って燃える炎に向かって合掌した。

『天の鳥船、天降し、天の八重雲かき分けて、天の御柱、国の御柱、人の御柱、平けく知ろしめせ……。』

二人は訳の分からない……恐らくは祈りの言葉なのだろう言葉をぶつぶつと口にして燃える炎に敵かな祈りを捧げた後に立ち上がり、部屋から出てきたカズヤを見つめた。

「それってそんなに大事な物だったのか……？」

自分へと向けられる鋭い視線に堪えた様子もなく、軽い口調でそんな事を聞いてみる。当然、祈ってた隙にポケットの中に入っていたカードデッキとペーパーナイフを取り出し、何時でも変身できる準備は怠っていない。

「貴様……何者だ？」

女が腰の刀に手をかけながら、一歩前に踏み出した。

「……質問に質問で返すもんじゃないだろうが……。まあいいか、別にオレは怪しい者じゃない、タダの旅の途中で届け物を頼まれた旅人……。」

「こんな廃棄された神社に潜んでいる奴のどこが怪しくないと
言うのだ！？ しかも、態度も格好も怪しげだろう！」

思わず女の言葉に『ごもつとも』と同意してしまう。間違いなく、
この時代の人間からしてみれば、自分の服装は怪しい事このうえな
いだろう。

女は剣の柄に手をかけたままカズヤに向かって近付いてくる。

「仕方ない……か。」

すばやく掌に隠しながら、カードデッキをペーパーナイフの金属面
へと向ける。その様子は正に一触即発。

「何者だと尋^きいている……。」

「悪いが、これは正当防衛だぜ……。」

女が放つ殺気が膨れ上がった時、それに応じる様にカズヤも殺気を
放つ。

「変……。」

「待て、清瑞^{きよみず}。」

カズヤが変身しようとした時、そんな声がかかった。

「「はい？」」「

女の放った殺気が不意に萎んだと同時にカズヤの放っていた殺気も

霧散した。

「わたしが話そう。」

「ですが……。」

「よい。お前は退きなさい。」

「はい……。」

不満そうな顔で女が脇に退くと代わって男が進み出てきた。男は力ズヤの前で跪くと軽く頭を下げた。

「見れば、この国のお方ではない様子。貴方は何者なのです？」

「オレは……ただの……彼は神の遣いだよ。」って、おい！」

突然響いた第三者のともでもない発言に思わず突っ込みを入れる力ズヤ。男は驚愕に目を見開きながら、声の聞こえた方向……後ろを振り返った。そこ……社の入り口にはキヨウがふわふわと浮かんでいた。

（キヨウ、余計な事を……！！）

「なんだ、貴様は……？」

「ま、ま、まさか……あなたは……。」

「まあ、一応……あんた等の国の神器の精らしいぞ……威厳ないけど。」

半ば諦めの極致で力ズヤは自分の正面にいる女に向かってそんな事

を呟く。こうなったら、神の使いでも何でもいいから、絶対に逃
ると心に誓って。

「おいらは天魔鏡てんまきようのキョウさ。」

「ははあ——っ！——！」

男は先程以上に床に頭を擦り付け深々と床に這いつくばった。

「い、伊雅様？」

「…本当に偉かったんだな、あのぬいぐるみモドキ。」

戸惑い交じりの女の言葉と呆れ半分のカズヤの言葉が響く。

「これ、頭が高いぞ、清瑞きよみず。おぬしは知らんかも知れんが、天魔鏡てんまきよう
は耶麻台国の七神器の内の一つなのだ。この蒼竜玉と同様のな。」

男は懷に手をつ込むと、手の平サイズの真紅の玉を取り出した。

「し、しかし。」

「あ、疑ってるね。じゃあ、カズヤ、見せてあげてよ。鏡はどこ？」

「ほら。」

ポケットの中に入っていた鏡を女に向かって投げ渡す。カズヤから
投げ渡されたそれを受け止めると男の元に向かう。

そして、女から銅鏡を引つたくる様に受け取った男は、何度も何度

もひっくり返したり逆さにしたり表にしたり裏にしたりして鑑定していたが、とうとう歓喜の声を上げた。

「まちがない！　これぞ、天魔鏡！てんまきょう　耶麻台王家の神器だ！」

「まさか、ほんとうに……。では、この男は本当に……。」

「そうだよ、彼は……。」

とりあえず、話のペースを取り戻そうと、カズヤは『タダの旅人』から『神の使いだけど、復興には手を貸さない』と言う方向へ話を進めようとキヨウの言葉を遮って口を開く。

「……オレは戦神オーデインに仕える神の使いたる十二騎士の一人。まあ、そっちでは聞き覚えのない名前だろうが……お前達には……『天あめの火矛ひぼこ』と言った方が分かりやすいかな？　そう呼ばれているの加護を受けた炎の騎士の友である風の騎士だ。」

適当にライダーバトルの設定をアレンジして言葉を続ける。一応、オーデインというのは北欧の神話の神様の名前だったと言うことは記憶していた。

「なんですと！？　はああっ！……！」

カズヤへと向き直り、再び額をこすり付ける様にひれ伏した。

「遅かったな、それで相手はどんな様子だ？」

「うん、大変なんだ。」

「…話してくれ…」

こほんと小さな咳払いをして、キヨウはカズヤの隣まで移動すると
跪いている二人に向き直り呼びかける。

「えーと、伊雅と、そっちは…」

伊雅は改めて一礼すると傍らの女を指差して応えた。

「こちらに控えておりますのは、清瑞^{きよみず}。わたしの護衛役である乱破^{らんぱ}
でございます。」

（乱破^{らんぱ}…忍者の先祖みたいなものか？ まったく、あの殺気や態度
にも頷けるな。）

「えーと、清瑞ね。じゃあ、二人とも、良く聞いて。今は時間がな
いから、詳しい説明は後でするから。とにかく、ぼくと、神の使い
であるカズヤは耶麻台国を復興させる為にこの地へやってきたんだ。」

「なにを言っているんだ、言葉が足りないぞ、キヨウ。オーディン
様が仰っていたじゃないか、人の問題は人の問題として人の手で解
決して、オレは復興できる立場にある人間にお前を届けるとしか
言われてないぞ。」

「はは——っつ！」

キヨウとカズヤの言葉を聞くや否や、伊雅はまた頭を床に擦り付け
た。

「まあいいだろう、キヨウ。こうして、元副王である伊雅殿の元にお前を届けたんだ。オレの役目はこれで終わった。後はこの地にいる火魅子の資質を持つ者を探し出して見事復興させるのだ。」

「ちよつと、カズヤ！」

いきなり、後ろを振り向いてカードデッキを取り出してすばやくペーパードナイフへとむける。

「変身！」

カズヤの体に二つの像が重なり、仮面ライダー^{ナイト}の姿へと変わる。それを見て伊雅と清瑞の顔が驚愕に包まれる。

そして、すばやくカードデッキからカードを抜き出し、それをダークバイザーへと差し込む。

『ADVENT』

呼び出したダークウイングが翼となり、屋根を突き破って神社を飛び出していく。

神社を飛び出した時何かキヨウが騒いでいるが、全面的に無視しつつ、ナイトはそのまま飛び去っていく。

「あの御方は行ってしまわれたか。」

「大丈夫だよ、カズヤは絶対に戻ってきてくれるから…。」

カズヤは気付かなかった…カズヤが寝ている隙にキヨウがカードデ

ツキから一枚のカードを抜き去っていた事に…そう…風を連想させる青い下地に翼がかかれたそのカードの存在に…。

つづく…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1671b/>

The Knight Of DRAGON外伝『騎士-ナイト-』

2010年10月10日02時54分発行